



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

四旬節第2主日B年(2021年2月28日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：創世記 22章1-2、9a、10-13、15-18節

第二朗読：使徒パウロのローマの教会への手紙 8章31b-35節

福音朗読：マルコによる福音書 9章2-10節

今日のテーマ：「<sup>おそ</sup>恐れる」と「<sup>おそ</sup>畏れる」

三つの朗読から

第一朗読にある「あなたは、自分の<sup>ひとご</sup>独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった」(12節)という天使(御使い)の言葉にハッとさせられます。アブラハムは大切な息子イサクをささげようとしています。年を取ってやっと手にした大切な息子を「焼き尽くす<sup>ささげもの</sup>献げ物としてささげなさい」(2節)という神さまの言葉に従ってささげようとしています。ためらいはなかったのでしょうか？<sup>うたが</sup>疑いはなかったのでしょうか？<sup>りふじん</sup>理不尽にも思える神さまからの命令に<sup>ちゆうじつ</sup>忠実であろうとするのは、アブラハムが「神を<sup>おそ</sup>畏れる者」(12節)だからです。

第二朗読の「その御子<sup>おんこ</sup>さえ惜しまず死に渡された方」(32節)とは父なる神さまです。アブラハムがためらいと<sup>うたが</sup>疑いの中で「息子<sup>ほふ</sup>を屠ろうとした」(創22章10節)のと同じように、父なる神さまも<sup>くる</sup>苦しみの中でご自分の御独り子であるイエスさまを十字架上でささげてくださったのです。そこに、<sup>ぜんひ</sup>全被造物に対する父なる神さまの<sup>きようかん</sup>共感と愛があるように思います。人間を愛するが故に大切なものをささげつくしていく神さまの<sup>すがた</sup>姿です。

福音にある「目の前で<sup>か</sup>変わり」(2節)は直訳すると「<sup>ちよくやく</sup>変えられた」となります。イエスさまを変えてくださったのは父なる神さまです。変えてくださった父なる神さまに<sup>しんりあ</sup>信頼してイエスさまは十字架への道へと<sup>あゆ</sup>歩みます。なぜなら、イエスさまには「これはわたしの愛する子」(7節)という天からの声がいづも<sup>ひび</sup>こころの中で響いていたからです。

## 【ひとこと】

日本語で「恐れる」と「畏れる」は同じ発音なので、理解する際には区別が必要です。恐怖に駆られるという意味での「恐れる」と、自分を越えた何ものかに尊敬を表す意味での「畏れる」では意味がまったく違います。後者の「畏れる」は「おそれいる」という表現を生んでいったのかもしれませんが。「敬服する」の意味合いがあります。生き方、あり方への賞賛としての「畏れる」です。ここから「畏怖」という表現が生まれたのでしょうか。

ヘブライ語では「畏れる」は「正しく生きる」、「礼拝する」意味があると雨宮師は指摘しています。今日の第一朗読に登場するアブラハムは神さまの道を「正しく生き」、神さまを「礼拝して」生きる人でした。その点で「神を畏れる者」(創22章12節) だったのです。

「彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい」(創22章1節) という命令は、理不尽にも思えるようなものです。それでも、アブラハムは神の言葉に忠実であろうとします。それは、神さまの道を「正しく生き」、神さまを「礼拝して」生きるためには、神さまからの言葉に忠実である必要があったからです。それは、アブラハムにとっては信仰のうえでの試練だったことでしょう。

第二朗読でも「畏れる」のテーマが展開しているようです。パウロは前置詞 + わたしたちという形でわたしたちのために」を繰り返します(ロマ8章31b、32、34節)。神さまが「わたしたちのために」何かをしてくださったという事実。しかも、それがご自分のひとり子であるイエスさまを「惜みせずに死に渡された」という十字架の事実は、神さまへの畏敬の念を起こさせます。

「畏れる」とは、神さまがなさった偉大な出来事への人間の側からの敬服や賞賛だけでは済まないものがあります。なぜなら、わたしたちのために十字架上で死んで、「復活させられた方であるキリスト・イエスが……わたしたちのために執り成してくださる」(ロマ8章34節) からです。つまり、「神を畏れる」には、神さまとのパーソナルな(人格的な)関わり合い、関係があるのです。最初に神さまが何かをしてくださった、その応対として人間は自分自身のすべてをかけて「畏れる」のです。ですから、「畏れる」は人間のこころのありようだけではなく、生き方全体に関わるものなのです。

福音の中で「この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった」(マコ9章3節) イエスさまのお姿に接して、お弟子さんたちは怖くなって「恐れます」(マコ9章6節参照)。しかし、「恐れ」が、「畏れ」へと変わっていくのは、復活なさったイエスさまと出会った後です。こうして、お弟子さんたちはイエスさまと同じように「愛する子」(マコ9章6節) となっていきます。

そのためには、アブラハムと同じように理不尽な体験である。イエスさまのお苦しみと十字架を目の当たりにしなければなりません。アブラハムが「神を畏れる者」として体験した信仰の試みを、お弟子さんたちもまた同じように体験する必要があったのでしょうか。

わたしたちも、人生の中で理不尽な体験を重ねていきます。試練として、それを受けとめた時に、「神を畏れる者」へと変えさせてもらえるのでしょうか。